

参加者の皆さんから

河川本来のダイナミックな環境変化と
の折り合いの付け方について、あらた
めて考えさせられた。

浦田格さん(山形県)

ウナギなどの魚が川を遡るのは、けっこう
大変なことだと理解しました。

宇野総一さん・智恵美さん(愛知県)



河口でのシラスウナギの捕獲や漁業権と
いう資源の占有などの問題や法規制。魚
とふれ合う事を全く絶たれた一個人が払っ
た税金で魚道を作るとするのも難解です。

伊藤至一郎さん(千葉県)

同じ川でも多種多様な堰がある事に驚くと共
に今回調べたほとんどの堰に魚道があり感心
しました。ただ、ウナギにとっては過酷な場所
には間違いありません。

藤原いつみさん(広島県)



ウナギ目線にはなりきれませんが、いつも
と違う着眼点で河川敷を歩くことができ
ました。連絡会の会報でも報告しました。

清末幸久さん・寺嶋美雪さん・

高野信雄さん・吉田千歌子さん(鳥取県)

今回の調査で、私が子供の頃にウナギを
釣ったことのある川と近くの堰を観察しま
した。近頃ウナギがいるという話を聞いた
ことはありませんが、少しでもいてほしい
気持ちでいっぱいになりました。

進藤直美さん(福岡県)



日本の川でウナギが育ち海で産卵し再び
川に戻ってくるという環境は、とても厳しい
世の中になっていると感じました。少しでも
生態系を崩さないようにしていきたいと思
います。

佐々恵美さん(愛知県)



治水、利水のために川を改修したり、人
工物を設置したりすることは仕方のないこ
とですが、護岸もふくめ生物の多様性を
配慮した創意、工夫がさらに求められて
いると思います。

井上賢一さん(兵庫県)

そのほか、本結果レポートに掲載しきれなかった集計結果や楽しい参加の様子は、NACS-Jのwebサイトにも掲載しています。ぜひご覧ください。

NACS-J自然しらべとは

子どもから大人まで、身近な自然に出かけて全国同じテーマでしらべる、市民参加型の環境教育プログラムです。
「みんなでみれば、みえてくる」を合い言葉に、日本自然保護協会が1995年から毎年続けている身近な自然の
状況を知る「自然の定期健康診断」です。集まった情報を学術協力者の方とまとめ、日本の自然を守る活動に
活用します。多くの方に自然を観察してもらうきっかけとなり、自然への愛着と関心を高め、日本の生物多様性を
守ることにつながってほしいと考えています。参加者数はのべ約78,000人になりました。

●主催：公益財団法人日本自然保護協会 ●共催：読売新聞東京本社 ●協賛：サニクリーン、カラータ ●誌面協賛：『日経サイエンス』日経サイエンス社、
『一個人』KKベストセラーズ、『散歩の達人』『旅の手帖』交通新聞社 ●協力：学研、モンベル、ニコン、富士通、パタゴニア、Google Earth Outreach、E-ne!～
good for you～(FMヨコハマ)、タッキー地球レポート(タッキー816みのおFM)、公益社団法人ガールスカウト日本連盟 ●助成：東京ガス環境おうえん基金 ●学術
協力：海部健三(中央大学准教授) ●川のイラスト：トミタイチロー ●参加者数：のべ1194人 ●調査地点：402か所 ●実施期間：2017年5月1日～10月31日

あなたも自然を守る仲間になりませんか 会員募集中！

〒104-0033 東京都中央区新川1-16-10 ミトヨビル2F TEL.03-3553-4102 FAX.03-3553-0139

Mail shirabe2017@nacsj.or.jp

会報「自然保護」No.562号(2018年3月1日発行)付録

日本自然
保護協会

自然のちからで、
明日をひらく。



自然しらべ2017

うなぎ目線で川・海しらべ！

結果レポート

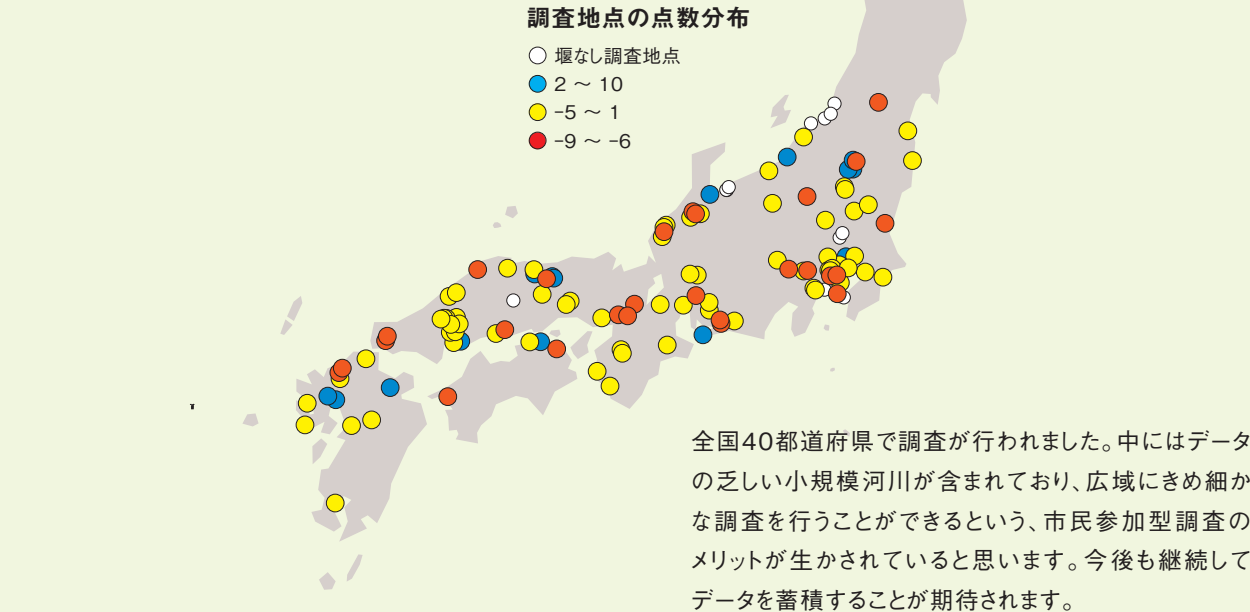
日本自然保護協会では、1995年から5年ごとに川しらべを実施してきました。過去4回の調査では、川のまわりの自然の様子は全体的に良い方向に進んでいるという結果でした。一方で、その生活史のほとんどを河川で暮らすウナギは絶滅危惧種に指定されるなど、河川の環境が必ずしも良くなっているとはいえない状況もあります。そこで今年は、ウナギ目線で川の環境を調べてみることにしました。
調査期間の2017年5月～10月に、全国でのべ1194人が402か所ですらべて情報をお寄せくださいました。そのようすをお伝えします。

主催	公益財団法人日本自然保護協会	共催	読売新聞東京本社	協賛	Sanikleen	COLORATA
誌面協賛	日経サイエンス	一個人	旅の手帖	散歩の達人		
協力	mont-bell E-ne!～good for you～(FMヨコハマ)	Nikon タッキー地球レポート(タッキー816みのおFM)	Gakken タッキー地球レポート(タッキー816みのおFM)	FUJITSU タッキー地球レポート(タッキー816みのおFM)	patagonia NEC presents THE FLINTSTONE(bayfm)	Google Earth Outreach girl scouts

「自然しらべ2017」は、東京ガス環境おうえん基金の助成を受けて実施しています。

全国の皆さんが送ってくださった写真やデータを通して、 今の川の様子が変わってきました。

調査地点402か所のうち、ニホンウナギの遡上を阻害する可能性の高い、40cm以上の堰（河川横断工作物）は全国から353か所報告されました。このうち魚道が設置されていると報告された件数は42%に過ぎませんでした。また、報告された魚道の写真には、ウナギのように這って移動する生き物ではなく、アユのように泳いだり飛び跳ねたりする生物の移動を助けることを目的とした形状の魚道も見られました。



点数	-10	-9	-8	-7	-6	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	総計
件数	0	6	6	15	9	19	23	44	69	41	44	16	3	9	5	10	7	7	12	6	2	353

総合点:「川のまわりのようす」「土手と川の間」「水際と川底」それぞれの様子を、見た目で自然の豊かな方から3点～0点に評価し、その結果に高さ40cm以上の堰があり魚道がない場合は-10点、魚道がある場合は-8点加えて計算した。

まとめ

今回の「自然しらべ」によって、身近な河川に多くの河川横断工作物が存在していることが明らかにされました。計算を行った範囲では、川の流れ1kmにつき、1.6基も40cmを超える河川横断工作物が存在していました。高密度で存在する障害物は、海で生まれたニホンウナギが成育場である河川へ侵入することを阻んでいます。川をきれいにすることや、コンクリート護岸を土や植生のある水際に戻していくこ

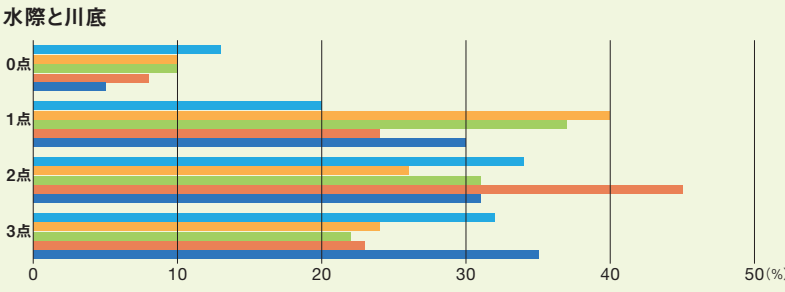
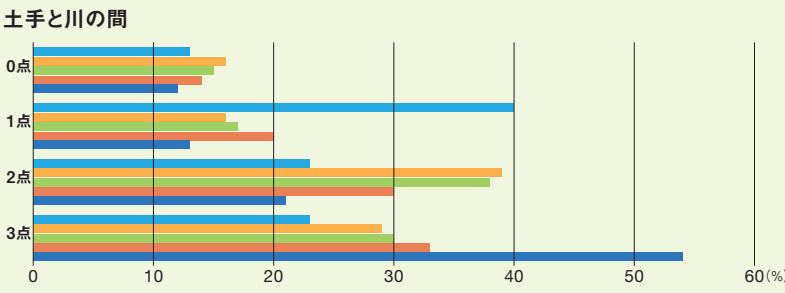
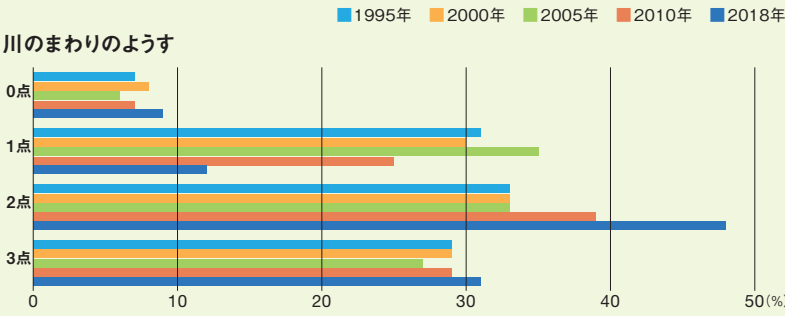


調査区間に関する情報のある6県6河川、総流路延長61.3kmを抜き出し河川横断工作物の密度を計算すると、落差40cm以上のものは1kmあたり1.6基、100cm以上のものは1kmあたり1.1基存在しました。環境省が行なった調査によれば、静岡県 of 青野川の本流には40cm以上の河川横断工作物が1kmあたり1.0基存在しており、今回の調査と同じような結果となっています。

となど、局所環境の回復も水辺の生物にとって重要ですが、海と川を行き来するウナギのようないきもののことを考えた時、最優先すべきは、海と川のつながりを取り戻すことです。海と川のつながりを回復するためには、河川横断工作物を撤去することが最善です。その必要性を再検証した上で、必要性が高く撤去が難しい工作物については、適切な魚道を設置する必要があります。魚道は、あれば良いというものではなく、様々な生物の生態を考慮し、場の環境に適合した、効果的な施設である必要があります。例えば、写真の魚道は河床低下の影響か、下流側に大きな落差が生じて

過去の自然しらべとの比較

1995年～2010年に実施した川の自然しらべ。前回2010年の調査項目の中から3項目を選び、過去との比較を試みました。結果としては予想通り、どの情報をみても各項目ごとの点数の低い川は少なくなり、引き続き川の周辺環境は良くなってきているようです。しかしながら、うなぎ目線で川を見た場合、40cm以上の堰があることで遡上が難しくなるため、総合点ではマイナスになる地点がほとんどで、ウナギにとって大変厳しい環境であることが再確認されました。



おり、有効に機能しているとは考えにくいです。小規模河川はデータが整理されていない場合も多く、所有者や管理者の不明確な堰も珍しくありません。今回の調査では、市民参加型調査のメリットが存分に生かされ、40都道府県より、小規模な河川を含む多様なデータが収集されました。今後も定期的に同様の調査を行うことによって、河川の状況を把握し、保全活動へ繋げていくことが重要だと考えます。